

《史料紹介》 吉原晋氏の戦争体験回顧録（後編）

瀬戸口 龍一

（大学史資料室）

この回顧録は、昭和一八年九月に専修大学専門部法科を繰り上げ卒業した吉原晋氏（没年・令和元年九月）が、平成二三年五月に私家版として発行した『大正・昭和・平成の時代に生きて【上】』の中から戦争体験に関する記述を抜粋したもので、前号の続きとなっている。なお、吉原晋氏については、本稿に収録した齋藤達哉『調査報告』剣道部第四代監督 吉原晋氏略伝』を参照していただきたい。

《逃避行・病気》

「執法隊に出頭すべし。」

とありますが、その前日の夜の九時頃に上田少佐に呼び出しがされた訳であります。

「命令。吉原少尉は今夜の夜行列車で、黄河北岸に向かって出発をすべし。行先は黄河北岸の駅舎の隣りの望楼。兵一を付す。」

上田少佐は、やはり軍人の中の軍人らしい方でありました。（広島県の三原市のご出身の方であります。）夜分でありましたが、きちんと軍服に

身を整えて、命令を下達された訳であります。私はその命令を復唱して、そして自分の将校の部屋に行つてとりあえず衣類をまとめ、それからお金があるだけ全部凶囊の中に入れて、開封の駅に行つた訳であります。

普通、少尉で移動するということになりますと、下士官兵が歩兵部隊だと約六十名の部下がいる訳であります。『兵一を付す』と言うのは、兵隊一名であります。その兵隊は大変お世話になった人で、（福岡県出身の方であります。）八幡兵長であります。八幡兵長という人は応召が三回あり、三回目の応召で来た訳ですが、ご年輩であります。三回も応召されて中国大陸を歩いていきますから、中国語が分かる訳であります。この八幡兵長が私の『兵一を付す』と言う私の部下であります。八幡兵長と二人で開封の駅から夜行列車に乗って、先程言った陽武を通って新郷に。新郷で列車に乗り換えて一路武昌に向かって行く列車に飛び乗って、そして黄河北岸と言う所で降り、嘗て霸王城攻略の黄河を渡る時の拠点でありました日本軍が一個分隊位いた兵舎と望楼があり、（煉瓦で作った銃眼の付いた望楼であります。）ここに八幡兵長と二人で私は身を潜めた訳であります。この黄河北岸というのは、日本軍が有名は霸王城攻略、そして洛陽攻略と進んだ黄河に掛けられた大変長い鉄橋で

あります。4kmを越える長い鉄橋のその麓にあつて、その鉄橋を守る為に作られた望楼と部隊の兵舎であつた訳であります。その中空き家になつてしまつて、その中で二人で早く言えば逃亡生活をした訳であります。逆に蒋介石の直系軍は徐州から満州へとどんどん行く訳でありますから、私は逆に北支に入つて行つた訳でありますから、方向は逆であり普通では捕まらない、というのが上田少佐のご判断であつたなあとこの思ふ訳であります。

この上田少佐はもう大変ご年配の少佐でありましたけれども、そういう点ではやはり判断の仕方が違うなあとということをお思ひ出す訳であります。黄河北岸の中に入つて八幡兵長と何をするとも無い訳であります。怖いのは中国の一般の住民の人に襲われたら大変なことになる訳であります。だから警戒は怠りませんでしたけれども、八幡兵長は若干中国語を話せますので、昼間に中国の民家から生卵とか葱を買つて来る訳であります。中国は鶏が大変多い所ではありますが、向こうでは卵のことをチータンと言うのですが、チータン（卵）を買つて来る。それから葱が大変ある所でしたので葱を買つて来たりして、その望楼の中で煮炊きをして二人で凌いでいた訳であります。十日位いたと思ひますが、その頃から私の体が段々黄色くなつてくる。熱が出てくる。体が痒くなつてくる。八幡兵長が心配して水を汲んで頭を冷やしてくれるのですけれども、熱が下がらない。段々段々体が衰弱して食べ物も食べられない。そこでこれは大変なことになるだろうと八幡兵長も判断したようであります。

丁度、洛陽攻略が終戦になつてしまつたので、姫路の鷲兵团（百十師団であります）がぼつぼつ引き上げてきた訳であります。この引き上げ列車が黄河の北岸を通つて北京に向かう京漢線であります。こ

れに乗つて北上する訳であります。その列車の隊長に八幡兵長が連絡を取つて、吉原少尉がこういう状態だと話したところ、「この列車にどうぞ乗つてくれ。」というようなことで、ふらふらになつてその百十師団の引き上げの軍用列車の中に乗つて新郷の駅まで行き、新郷の駅は大変大きな駅であります。まだ日本陸軍の兵站病院がありました。この兵站病院に、私は早く言えば担ぎ込まれた訳であります。多くの患者がいた訳であります。この新郷の兵站病院に入院を直ちにした訳であります。当時まだ軍隊は、勿論組織としては日本の軍人はしつかり組織が守られていましたので、私は兵站病院の将校病棟に入つた訳です。将校というのは将校ベッドというのが別にございまして、そこに入りました。入りましたら将校病棟にもう一人いらつしゃるといふ。その方は高田さんという奈良県のお医者さんで、四十歳を過ぎてから軍医に応召になつたといふ。お年寄りの方であつた訳ですが、軍医で病氣になつていたものですから、私の病状がどうだといふようなことも大変良く分る方であつた訳であります。その高田軍医さん、軍医少尉でありますので私と階級は同じでありますから、そこでベッドに横たわつて発疹チフスとマラリアの治療に入つた訳であります。

今、もう一つ、私はその当時日本の女性が開封には沢山おりましたけれども、兵站病院に入りましたら、勿論日本にはまだ帰れない訳であります。看護婦さんは皆日本人であります。

私は汗をかく黄痘発疹チフスでありましたから、病衣がもたない訳であります。確か四国のご出身の方で親切な看護婦さんが、（私達の部屋の看護婦さんであります）おそらく寝ないで縫つてくれたのだと思つたのですが、私に日本製の浴衣を縫つてくれて、

「吉原少尉殿、これを着て、汗をかいたら着替えたら良いですよ。」

と言つて頂いた。現在では跡形もありませんけれども、（これは実は内地まで復員後も持つて帰つて来ましたが）まさか戦地の兵站病院で浴衣を着れるとは私は夢にも思わなかつたのですが、縫つて下さった浴衣を病衣の代わりに、お名前は今記憶に戻つて参りませんが、大変親切にして頂いた看護婦さんの手厚い看護を受けながら私は快復をした訳であります。快復をしますと帰らなくてははいけませんので、開封の野鉄司令部の原隊に復帰をするということになつた訳であります。

連絡を取りましたところが、幸いにも上田少佐の作戦通り蒋介石の直系軍は既に満州の方に転進をしまつておりますので、その当時私を戦犯としていた部隊はいなかつた訳であります。ホツとしていた訳ですが、しかし戦犯というのはいやはり名前が残つていゝるであらうから、復員をし日本に上陸をするまでは私は頭のどこかに残つていて心配をした訳であります。

野鉄司令部に帰つて元の業務に復する訳であります。もう日本は戦いに敗れましたので、言わば捕虜であります。収容所ということになる訳で、収容所生活ということになる訳であります。そして何と言いましても、沢山の日本人を終戦になりましたから日本に送り込まなくては行けない、それから各部隊も送りこむ、私共の野戦鉄道司令部の仕事から言つて、帰れるにしても一番後だと言ふことは私は覚悟していた訳であります。内地とは全く音信不通。

私の両親はどうしているか勿論分からなかつた訳であります。丁度開封の日本人の編成を第一梯団、第二梯団、第三梯団と三個梯団に区分をして輸送に入つた訳であります。第一梯団を送る時に開封の駅に行きましたところ、私のところの西川伍長が私のところに跳んで来て、「吉原少将と同じ所の人の荷物があります。」

と言つので、私は驚いて現場に行つてみましたら、千葉県夷隅郡中川村大野 小高なにかしと書いてある。この荷物の持主はというと実は中年のご婦人と小さな子供さん二人でありました。

私は作田のこういう所だと言つても向かうの人は分らない。よく聞いてみると、

「私の主人の所であつて、私は実は千葉県のこの主人のこの家には行つたことが無いのです。私の主人は華北交通の社員でしたが、現地召集になつて今、どこにいるのか分かりません。したがつて、主人の生まれた所の千葉県に行くのです。」

こういう風なお話でした。私は詳細に、どういふふうにして、どここの駅で降りて。上総中川の駅で降りたら役場がすぐ近くにあるから役場に行つてお話しなさい、と細かく教えた訳であります。その代わりに、私も一通の手紙を認めて、私の父宛てに、私は終戦になつて今捕虜の生活の身であるけれども、日本人の輸送の為に、今こう言う所で元氣にいるということを手紙を認めてその方に託した訳であります。内地に帰つて来てから分かつた訳であります。私の父は実は大野のその方の家に訪ねて行つたものであります。それで私が生きていることを確認したようであります。その時の後で笑い話であります。その奥さんが首を傾げて、「お子さんですか？ 旦那さんの弟さんではないのですか？ 間違ひではないでしょうか？」

とこう言うことだつたようですが、「いや、私の倅です。」と。後で分かつたことですが、私は実は北支にいる頃も忙しく髭など剃らなかつたものですから、髭をはやして、少尉の軍服で、それも戦地ですからあまり良い将校服では無い物を着ていた訳であります。そこにきて髭面でありますから、随分年取つて見えたようであります。

私はその頃二十二歳であります。年取ったと見えてそういうようなことを私の父と問答したようであります。

そんなことで、私が生きていることは実は私の家族は分かった訳ではありません。

《開封へ帰る》

そういうこともあって私は開封の部隊に帰って参りました。そこで上田少佐や森本中尉、先任は中野中尉であります。私と同期の杉山少尉、以下下士官兵の皆さんと一緒に終戦後の捕虜生活を開封の小さな兵舎で過ごした訳であります。

そういう間に華北交通の開封の鉄路局長、今村さんと言う局長さんでしたが、この方はやはり責任上局員は第一、第二、第三梯団と三次に渡って送り込んだ訳であります。第三梯団だけが実は青島に行けなくて、蓮運港からということ、蓮運港で船が来ない、そこで早く言えば待機をしているということ、今村局長が重要な連絡事項を第三梯団長に連絡を取りたいけれども、電話は勿論使えませぬし局員を派遣するということもできない為に、私にその書類を蓮運港の第三梯団長まで届けて欲しいということになりました。

私も体がすっかり復調しておりましたので、それを私は実は単身であります。単身ですけれども、もう拳銃もありませんし軍刀も接收されて無いわけでありまして、早く言えば丸腰で軍服を身に纏って蓮運港まで行きました。

途中で徐州がありますので、徐州の野戦司令部で休養、所謂食事等を頂いて、そして蓮運港まで行ってその任務を達成した。その人達は蓮運港から日本に帰る訳であります。私はまたその蓮運港から奥地の開封

まで中国の列車、列車と言っても無蓋車であります。屋根の無い貨車であります。この隅に立ったままでは開封まで再び帰って参りました。

今考えますとよくも度胸があつたなあと思えますが、私は度胸では無くて、もう戦いに負けた、我が身はどうなるかと、というような捨て鉢的な気持ちもあつたような気も致しますけれども、無事に蓮運港まで行ってまた奥地の開封まで帰って参つた訳であります。

《日本帰還》

そうこうしている内に奥地の方の邦人もほとんど送ってしまった。それから奥地の方におりました日本の陸軍の各部隊もみんな列車で海岸の方に来て、それから日本に復員した訳であります。

いよいよ私達の鉄道第六連隊と野鉄司令部が最終の引き上げになる訳であります。

私達の引き上げの時にはもう客車などありませんので、貨車の真ん中に棚を作つて上と下とでやつと座れる位で、（座ればどうにか頭が隠えませんが、立つたら頭が隠える訳で）貨車の中に蚕の棚のように作つてそこに横になる訳であります。これで最後の日本軍が北支から引き上げる訳であります。私共北支と言っても丁度中支の境であります。から、徐州に出て、徐州から浦口に下りまして浦口から上海であります。そして上海で最後の武装解除の検閲を受けた訳であります。

ここでの検閲は、もう途中で何回も武装解除されていますので、これという物はほとんど無い訳で、言わば着の身着のまま、私達将校は将校行李一つに自分達で作つたりユックサック、これに乾パンを入れて飢えを凌ぐ訳であります。その乾パンは、実は北支の開封を出る時に、野鉄の部隊で焼いた訳であります。向こうは麦粉の多い所ありますから、

ドラム缶を釜にしてメリケン粉に卵を入れてかき混ぜて、乾パンを焼いた訳であります。

軍隊という所は非常によくできた所でありまして、パンの職人さんがいる、鉄工所に勤めたような人もいる、そういう軍隊というのは色々な職業の人がいますので、結構そういうもので乾パンを沢山作った。ところがみんな腹が減るものですから、乾パンを作る職人さんにはそれぞれ戦友がいますので、作っている最中に夜中になるとそこそこもらいに来る。そういうようなことで主計将校がとても監視ができませんので、私の方に白羽の矢が立って私に監視をしてくれと。唯しかし私共同じ戦いをしてきた同僚がたまたま乾パンを作る技術がある為にそこにいる、その同僚が夜中飯盒を持って来てお腹が空いているからもらいに来る、まあ、私も見て見ぬ振りをしながらいたことを思い出します。私も食べた訳であります、見て見ぬ振りをしておりました。

そういうような食料を背中の、背囊がもうありませんのでずた袋で作ったりユックサックみたいなおかしな物の中に各自持って、上海まで飢えを凌いで来た訳であります。上海でいよいよ最後の武装解除の検閲が終わって、LST（戦車揚陸艦）に上海のウスの港で乗った訳であります。

その時の気持ちというのは今もって忘れませんが、私は戦犯指定を受けている吉原少尉でありますから、船に乗船し甲板に上がって港から船が離れる瞬間に、

「ああ、これで俺は生きて祖国の地が踏めるな。」
という実感が湧いて参りました。

他人にはあまり見せられませんけれども、やはり私なりに涙が出たことを思い出します。

これで祖国の地が踏める。

そして私達は東シナ海を渡って博多の港に着いた訳であります。

博多の港に着きますと直ぐ上陸はできないので、ここで船の中で一泊をする訳であります。そして、最後の病疫の検査を受ける訳であります。体には虱が沢山いますし、マラリヤを持っている人もいます。或いはチフス等の菌を持っている人もいますから、ここで徹底した検査が行われて、それから上陸ということになる訳であります。

ここで私達は、階級章を全部外した訳であります。

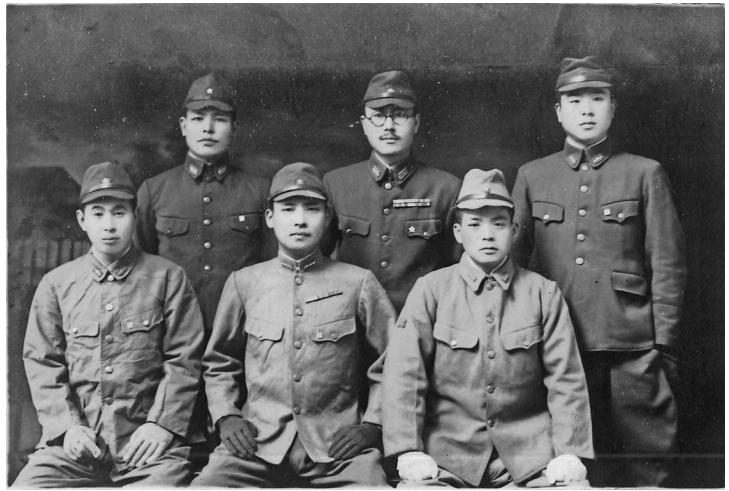
博多に着くまではやはり軍の統率の優位からも階級章が付けられていた訳であります。ここで船の中でいよいよ部隊長以下一兵卒に至るまで階級章を外した訳であります。所謂軍隊の統率がここで切れた訳であります。所謂復員であります。

そのようなことが船の中で行なわれて、いよいよ上陸ということに相成った訳であります。

《復員》

上陸を致しますとアメリカの兵隊が沢山おられます、私達は頭の上からお腹の中、ふんどしの中までDDTを嫌と言うほど掛けられた訳であります。所謂虱等がこの為に駆除される訳であります、頭から足の先まで、或いはお腹の中まで真っ白にDDTを吹き付けられて、そして整列をしていよいよ復員が完結を致した訳であります。

私は千葉県出身の西川伍長（西川さん）と、白井上等兵（白井さん）と、千葉県出身でありますので、三人で博多の駅から一路東京に向かって列車に乗って帰って来た訳であります。いずれに致しましても復員列車でありますので、もう座る所も無い位でございました。しかし再び生



前列：左より西川伍長、田村曹長、堀田上等兵／後列：中北准将、今立准将、吉原少尉（ご遺族提供）

して、ふと私は思い付いたのは、順吾叔父さんが警視庁に勤めておりましたので、多分空襲でも生きているだろうと、両国駅からちよつと歩いた所の本所警察署まで行って、梶順吾という警部補が今どこにいるだろうと確かめました。幸運と言いますか、受付に出た方が直ぐに分かりまして、警視庁の警備課にいらつしやる、と教えて頂きました。そして電話連絡しましたところ、夕方になれば帰るから、夕方叔父が泊まっている宿舎、警視庁の警養寮という京橋にあった訳であります、そこに来るようにということで、私は両国駅から三人で警視庁まで行って、叔父

きて祖国の地が踏めた、日本の景色がみられる、というようなことで大変感激をしながらこの列車に乗って東京に向かった訳であります。

いよいよ東京駅に着いたのが昭和二十一年の五月二十九日だと思えますが、午前十時頃東京駅に着きました。三人で両国駅に行った訳であります、直ぐに列車が出ない、というようなこともありま

さんに会って細かい連絡をした訳であります。

そういうようなことで夕方まで時間があるものですから、三人で何年振りかで日劇で映画を見ようということ、映画館に入った訳であります。確かその時は、原節子主演の映画だと思えます。映画の名前はちよつと思い出せませんが、その映画を見て夕方になるのを待った訳であります。しかし周囲は、あまりにも私達復員軍人というのはもう五十日近くも着の身着のままでありますので、服装はいたって汚い。途中で電気が切れまして、ふと周囲の人達が私達を見て、「あら、汚い。」というような若い女性の声を耳にした時には私もハッと怒りを感じましたけれども、そのようなことがあって映画を見て、そして夕方出て、叔父さんの京橋の警視庁の警養寮に三人で行きました。叔父さんも単身でその寮長をしていたのですけれども、とにかく北支の奥地から東京に来るまで全く風呂にも入って無い訳でありますので、何をおいても三人で風呂に入ろうということで、叔父さんに連れられて近くの銭湯に行った訳ですが、その当時は残念ながらあまりお湯も良く出ない、そのような銭湯でございましたけれども、いずれにせよ五十日近く風呂に入っておりませんので、この味わいというのは何とも言えない感じでございます。そして夜、叔父さんの手料理で三人で夕飯をご馳走になった訳であります。翌日早く寮を出て三人で両国駅に着いた訳であります。両国から電車に乗った訳ですが、その当時電車は千葉までしか動かなかったように記憶を致しております。

予め叔父さんに加茂の博君が千葉の第一陸軍病院に入院中だということとを聞きまして、千葉駅で西川、白井の両氏に別れを告げて、私は単身で陸軍病院に加茂の博君を見舞いに行った訳であります。

私は勿論将校の階級章はありませんけれども、将校服に身を固めて第



親友加茂君と（昭和16年1月撮影、ご遺族提供）

一陸軍病院に行った訳であります。まだ軍隊の感じがございまして、通りに行く傷病兵が敬礼をしてくれたりしておりました。加茂博君は直ぐ分りまして、その部屋に行つて何年振りかで顔を合わせた訳であります。

加茂博君は実は私と同じ日に近衛歩兵第五連隊に入った訳であります。全く中隊が違いますので北支では顔を見なかつたのですが、たまたま石門の士官学校に入りました時に、彼も甲種幹部候補生で参りました。第四区隊に所属をしていたのですが、二ヶ月位で下痢がひどくて石家荘の陸軍病院に入院をいたしましたその時に、

「俺は駄目だ。」

というような話をしていましたので、元氣付けて、

「陸軍病院で療養して再び士官校に帰つて来なさいよ。頑張りなさいよ。」

というようなことで予備士官学校の兵舎の中でそんな会話をして別れたきりでありまして、全然その後の行方は分からなかつた訳であります。陸軍病院に来たところが、療養

生活に入っていた訳であります。聞くところに依りますと、その後は陸軍病院から大同の（大同と言うと蒙古に近い方ではありますが）歩兵部隊に転属になって、そして乙種幹部候補生に降格をされて、軍曹で復員をしたのだと、いずれにしろ二人共生き長らえて今日日本に帰つて来たので、二人で握手をして、

「早く療養をしなさいよ。元氣で家に帰れるように。」

「僕は一足先に家に帰るから。」

というようなことで別れたことも思い出であります。

加茂博君とは中川小学校の六年間、大多喜中学校の五年間は毎日一緒に通つた仲でもあります。そして彼は千葉師範学校から学徒動員で私と一緒に北支に行つた訳であります。彼はその後どうしても体調が思わしくなかつたのでありますが、一時退院を許されて確か千町の小学校の教諭として奉職をしましたが、数年位で再び再発をして亡くなった訳であります。今もつて彼の冥福を祈っておりますが、そのようなことが千葉でございました。

《帰宅》

そして私は単身で千葉駅から房総東線（その頃、外房線を房総東線と言つておりました）に乗りまして、大原で降りて大原駅から木原線で中川駅に着いた訳であります。勿論単身であります。私共軍曹は将校行李の中に夏の袴が二着、冬の袴が二着ずつに僅かな身の回り品が将校行李の中に詰められている訳であります。私はそれを、身に纏わないで北支にいた時の古い軍服のまま帰つて来た訳であります。将校行李もそのようなことで大変重いものですから、確か中川の駅の後藤さんのお店に寄つて、

「作田の吉原でございますが、直ぐ荷物を取りに来るので置いて頂けませんか。」

とお願いをして、単身で先ず役場に寄って復員をしたことを告げた訳であります。そして役場は簡単に終わった訳ですが、その役場というのは私達が入隊をする時送られた役場と全く同じ木造の建物であった訳であります。ここで復員したことを役場に報告をして一人だとぼとぼと家に帰って参った訳であります。

丁度家の長屋門の所に来ますと、椎の木の大きいのが今でもありますけれども、父が一人で植木を鉢んでおりました。私が帰って来たのでビックリした訳であります。全く予告が無い訳でありますから、大変びっくりしましたが、前にも言ったように私が北支の戦線で元氣であるということはお二人の方から父親は聞いていた訳でありますので、私が帰って来たのにビックリはしたものの内心は安堵したようでございます。

交わす言葉も特にありませんでしたけれども、二人で母屋で腰掛けながらお茶を飲んで、そして何年振りかで我家の布団に包まって生きて再び帰って来たことの味をしみじみと感じた訳であります。しかし残念なことは、私が大変小さい時から面倒を掛けたお祖母さんは、既にこの世にはいなかった。私の帰って来る一年前に実はもう亡くなっていた訳であります。

私が戦地でお祖母ちゃん宛てに送ったお金を抱きしめながらこの世を去ったというのを、後で叔母さんに聞かせられまして、

「ああ、親孝行のせめてのことにしたなあ。」

というようなことをその当時強く感じた訳であります。その日は我家の水入らずで夕飯を食べた訳であります。幸いにして妹も弟達も皆元氣でいた訳であります。我家は既にお祖父さんお祖母さんはおりませ

んでした。両親と弟や妹達だけでその夜を過ごした訳であります。

翌日、いろいろお世話になりましたので、先ずご近所の皆さん方、部落の主だった家に無事帰って来たことのご挨拶に回った訳であります。

そして一週間位かけて中川村以外の親戚も大変ご心配をかけておりましたので、全部自転車に乗って、今のように自動車はありませんから自転車でご挨拶に行った訳であります。

そうこうしている内に実は戦地で受けたマラリヤが再発を致しまして、三日三晩位大変な熱が出る訳であります。夕方三時頃になると体がぞくぞくとしてくる。ああマラリヤだなあとということが自分で直ぐ分かる訳であります。私の両親はびっくりする訳であります。40℃位の熱が出ますので、大変びっくりしたようではありますが、そのマラリヤに二年位実は悩まされた訳であります。

そういうようなことで、これといったこともなく、家で療養的な生活をしておりましたけれども、何と言っても将来がある訳であります。私は文官分限令十二条三項の規定で現役で行った訳でありますから、私の席は東京税務監督局、所謂大蔵省にある訳であります。このまま放っておくと、一定の期間を過ぎてしまいますと復職が叶わないことになりまして、私は上京を致しました。

そして、当時は税務監督局は既に財務局という名称になっておりまして、東京財務局に行きましたところ、私の席は赤坂税務署にあった訳であります。所謂赤坂区と麻布区を管轄する、早く言えば日本の高級地と言いますか一等地と言いますか、各国の大使館、公使館がある所でありまして、ここに赤坂税務署があったわけでありまして。そこに行きますと、お会いした署長さんは志場喜徳郎さんと言う署長さんでございます。東京大学を出られて高等文官試験に勿論合格をされた若い署長さん

であります。私より若干の年上のようでありましたけれども、陸軍の主計大尉で終戦を迎えたようでありました。私達、軍人のことがよく分かる訳でありまして、私の事情を申し上げましたら、

「北支の戦線で苦勞して、マラリヤを持って来て家で療養をしているそうだが、大変だろう。しばらく休養していなさい。」

というようなことで、実は私の職業としては一応保障された訳であります。泊まる所もありませんので、その日の内に我家に帰って来た訳であります。その時に千葉税務署辺りなら家から通えるだろうかというようなお話がありましたので、

「千葉ならば何とか列車で通えると思います。」

というようなことで帰って来た訳であります。当然、千葉税務署に配置換えになるのかなあと思っておりましたが、確か八月の末頃だと思えます。五月の末に日本には帰って来た訳であります。八月の末頃に赤坂税務署長から一通の封書が参りまして、開けてみましたら、

「茂原税務署勤務を命ずる。」

という辞令が入っておりました。実は署長さんの計らいでもっと近い茂原の税務署に私を配置換えをしてくれたということで、大変感謝をした訳でございます。

〔附記〕本稿は、二〇二一年度基盤研究（Ｃ）科学研究費助成事業（課題番号21K00811）の成果の一部である。